

# 令和3年度 第2回ニセコ町観光審議会 議事録

## 1 日 時

令和3年(2021年)9月22日(水) 14:00~16:30

## 2 場 所

ニセコ町役場 1階 多目的ホール

## 3 出席者

委 員 下田委員(会長)、菊井委員(副会長)、岩崎委員、高井委員、大橋委員、石黒委員\*、若杉委員、桑添委員、高久委員、尾形委員(10名)

調査委託先 公益財団法人日本交通公社 観光地域研究部 環境計画室 中島室長\*

ニセコ町 商工観光課 斉藤課長、高橋参事、谷井係長

小樽商科大学 後藤准教授、大湊\*

※緊急事態宣言期間であるため、「\*印」はオンラインでの参加

## 4 内 容

### (1) 下田会長挨拶

前回の意見交換では、委員の皆様から有意義な意見をいただいた。今回も前回同様に忌憚なく、それぞれの立場から思っていること、将来どのような地域にしていきたいかなど、全員で共有しながら考えていきたい。

### (2) 委員・報告者挨拶

今回初出席の高久委員、桑添委員、および、調査委託先である日本交通公社の中島室長から自己紹介があった。

### (3) 議題

#### ① ニセコ町の将来像について(ニセコ町 高橋)

前回の審議会では、ニセコ町観光の現状や課題を共有した上で、意見交換を実施した。委員から出た意見を踏まえ、課題を再整理し、「季節変動の平準化」、「観光経済効果の向上」、「国際的な競争力の向上」の3つに集約した。そこから目指すべき将来像(案)として、「通年型の国際リゾート地」、「町民が誇れる観光地」、「国際的な基準を満たす持続可能な

観光地」の3つを示した。

それらの将来像を実現させるための4つの柱として、「観光産業の地域への貢献度を高める」「観光客の地域に対するリスペクトを高める」「観光によって町民生活の質を高める」「観光による環境への負荷を最小化させる」を整理した。(特に質問や意見はなし)

## ② 観光を取り巻く環境の変化、現状・課題について (日本交通公社 中島室長)

観光計画・戦略のトレンドと持続可能性指標について紹介したい。UNWTO (国連世界観光機関)の声明によると、コロナ後の観光は元の世界に戻るのではなく、イノベーションとサステナビリティを確保していかなければならないとされている。2019年当時における世界全体の旅行観光市場は8.6兆ドル、そのうち6.29%がサステナブルツーリズム市場だった。コロナがなければ2019年から5年後には1.5倍程度、市場全体の1割程度まで増え、存在感を増していくという予測だ。サステナブルツーリズムは拡大傾向とはいえ、エリアによって進捗具合が違い、進んでいるエリアの大半がヨーロッパである。アジアはまだまだ小さい規模だが、ニセコはヨーロッパ型を目指す、アジアの中でも先駆けて取り組んでいくという立ち位置だと理解している。

世界におけるサステナブルツーリズムの取組で特徴的な2つの動きを紹介する。1つは国や行政が行うだけではなく、観光産業の現場で観光客にも持続可能な観光に配慮した行動を求めていくものである。例えばアイスランドでは、来訪者に「責任ある観光客」になることを宣誓させている。これは堅苦しいルールで縛るというのではなく、クイズ形式でアイスランドの取組を事前に把握してもらう仕掛けである。もう1つは、観光業界が本気でサステナブルツーリズムに取り組み始めている事例である。ニュージーランドでは、観光業界が生き残るために、「環境・来訪者・地域住民・経済」に対しての取組等を、観光業界が自ら決め、公開している。これは、これまで世界に無かった動きである。

次に、観光戦略・計画の事例を紹介する。ノルウェー、ハワイ、オーストリアのウィーンを紹介するが、いずれも、どのように戦略と計画のゴールを設定するか、どのような目標を設定するか、その到達度合いを定量的に図るべく数値としても目標を掲げている。これが持続可能性指標 (STI=Sustainable Tourism Indicator) という取組である。持続可能性指標の目標値が、色々な項目で定められていれば、計画の途中で実行施策と成果にズレが生じていないか、悪化していないかを確認することが可能となり、悪化していれば良化させるための取組を考えて実行することが出来る。

ニセコ町においては、事務局から説明があった将来像に対し、課題と取組を設定し、その達成度合いを持続可能性指標により計測していくということになる。この指標計測は、いわば人間でいう健康診断のようなものである。ありがたい姿との現状のズレを定期的に確認することで、次の打ち手を考えることが出来る。別の目的としては、指標設定により他エリアと数値で比較をすることが可能となる。ニセコ町でどのような指標が良いか、仮案は日本交通公社より出させていただく。

最後に、ニセコ町観光振興ビジョン策定スケジュールに入っているモニタリング調査は、背景として持続可能な将来像、そのための指標を設定するにあたり、現在計測はできていないが計測した方が良い項目、今後計測したい項目など、継続的なモニタリングを可能に

する仕組みも含めて把握するために実施するものである。現時点の案の一つとしては、ニセコ町住民意識調査を考えている。観光についてももちろんだが、ニセコ町で進めている政策、居住環境など多岐にわたり計測をしていく。別の案として、環境の負荷量計測も良いと考えている。海外ではシステムも構築されていて計測を行なって対外的に公開しているエリアもあるが、日本の観光地で環境負荷量を知らせているところはない。実施することで、持続可能な観光振興をする地域としてフロントランナーのイメージ付けも可能となるので、取組としては良いのではないか。(特に質問や意見はなし)

### ③ 高校ワークショップの報告について (小樽商科大学後藤准教授、大湊)

ニセコ高校にて実施した第1回ワークショップについて、情報共有したい。観光振興ビジョンに関して、10年後、さらのその先のニセコ町を考えると、そこで主役になって欲しいのは現在の高校生たちである。ニセコ町に住む高校生たちがどのようなことを考えているか、課題認識を確認するのがワークショップの狙いである。9月14日に第1回目、10月13日に第2回目を予定している。第1回目は自由な意見の発散、第2回目は意見を集約し、提言としてまとめる予定である。

第1回目は合計10名の参加であった。事前課題として世界や日本で行われている観光について持続可能な取組事例を調べ、当日2つのグループに分かれて議論を行った。「ニセコはなぜ持続可能な観光に取組むのか」、社会経済・文化・環境への効果から考えるというテーマでワークショップを実施した。ワークショップの様子はニュースレターという形で町民に公開される予定である。

## (1) 意見交換

「ニセコ町観光の将来像」「持続可能性指標」について、後藤准教授の進行で意見交換会を行った。

### 〈石黒委員〉

まずは、「ニセコ町をどのような観光地にしていきたいか」というイメージを共有することが大事だ。日本交通公社の中島室長から持続可能性指標は健康診断のようなものと説明があったが、その前に「どのような自分になりたいのか」、家づくりで例えるなら「どんな家をつくりたいか」だと考えている。先ほど説明のあった「4つの柱」は、ストーリー立てて伝えられると良い。例えば、観光による環境への負荷を最小化させることができると、観光産業の地域への貢献度が高まる、そして貢献度が高まると住民の皆さんも快適に暮らせる、最後に住民が快適に暮らせる地域は印象が良くなるので、観光客もその地域ルールなどを破らないよう行動するよう変わってくる。4つの柱が歯車のように、どのように回っていくかを考えないといけない。ストーリーとして整理すると、指標とその上にある目指すべきゴールとのつながりがわかりやすくなる。

次に、実際にニセコ町がどのような地域になりたいのかを具体的に考えていく必要がある。色々な事業者の方が委員にいらっしゃるので、様々な視点から大きな絵を描くのが良いと思う。美瑛の事例では、「観光客の単純な増加を目指すことをやめて、農家と観光客が

お互いの重要性を理解し合える町にしたい」という方針を観光ビジョンを上位に掲げた。過去には、近隣の観光地に負けるな、追い越せの姿勢で観光に取り組んできたが、観光客が農地侵入などの問題により、農家が観光を疎ましく思う事象が起きていた。そこで、農家と観光客あるいは農家と観光事業者がお互いにリスペクトし合える地域を目指す、そこをイメージして取り組むべき柱をつくって行った。

#### 〈後藤准教授〉

ストーリーを考えましょうというのは、外から誰にどのように見られたいか、ターゲットを絞って、ニセコ町としてどのようにメッセージを出していくか、ということか。

#### 〈石黒委員〉

ニセコ町をどう見て欲しいのかを考えるということ。ガイドブックやウェブ検索で自分のまちを調べた時にどのようなイメージで紹介されたいかということを考える必要があると思う。スノーリゾートが良いのか、そうではないイメージなのか。

#### 〈若杉委員〉

本日のインプットで、KPI を定める議論というよりは、ニセコ町としてのゴールイメージをすり合わせることだと理解した。そして、成長なのか成熟なのか、まちづくりにおいてこの選択を問われていると感じている。個人としては、急がない成長、つまり成熟をニセコ町としての軸にしたほうが良いと感じる。ヨーロッパはサステイナブルツーリズムが進んでいて、田舎で暮らしている人たちの満足度が高いと聞いていて、ニセコ町民のひとりとして憧れる。ヨーロッパのような成熟した時間の流れ、みたいなものをニセコで味わえるようにしていくまちづくりが必要だと考える。

一方、町民に説明する意味でも、日本が国策として観光をどのように進めていくか、日本がこの方向に進むから、ニセコがその牽引者やリーダーシップを発揮するようになっていきたい、と話せるほうが良いと思う。

ビジョンについては、この4つの柱で十分包括できていると思う。順位付けとかは必要だが、減らす必要はない。ただし、誰がやるのが重要だ。町民と一緒にやっていくのであれば、どのような人材が必要なのか、人材の数や人材の質はどのように担保していくのか、その仕組などを示す必要があると感じる。計画よりも実行することが大切で、実行していくのは人材であり、もしこの計画を担っていく機関があるのであれば明記したほうが説得力はある。

また、豊かさ、成熟で考えると、選択肢の多様化に繋がっていく。自然でいうと水や空気、そして農業、食などである。様々なサステイナビリティの取組があって、その中の観光分野におけるビジョンである、というように見せて行けたら町民にとってもわかりやすいと感じた。

#### 〈後藤准教授〉

人材育成、田舎暮らし、食など多岐にわたる意見だったが、中島室長の方で気になる点

などあったか。

〈中島室長〉

重要な視点だった。ニセコにとって、何が重要で、何を進めていくべきなのかは、皆さんでしっかり議論すべきだと思う。また人材については、4つの柱の中に入れていくのか、4つの柱を実現するための政策として一段下に入れ込んでいくのか、どちらが良いか慎重に議論すると良いと思う。

〈後藤准教授〉

組織で例えると、人材は経営資源であり、この資源をしっかりさせることが経営には重要である。また観光地のライフサイクル理論で言うと、日本は観光のピーク時にコロナになったが、ここからどのような手を打つかが重要である。成熟からさらなる成長をしていくには色々な課題解決が必要となる。

〈桑添委員〉

今回のコロナ禍で感じたのは医療体制の弱さである。たくさんの観光客を入れたとしても、医療が提供できないことが不安要素となる。住んでいても不安だったので、どのような医療体制を構築していくかというのはもっと話し合いたいし、基盤を固められたら観光地として底上げになる。

知人経由でも、空気や水という自然環境、野菜などの食も良いことから、後志エリアに住むだけでモデルさんが綺麗になるという話を聞く。医食同源なので、後志に滞在するだけで健康になる、綺麗になるというのを打ち出していくのも観光としてはありだと思う。お客様からも周辺の町と比較して、ニセコの方が雰囲気が良い、ニセコ町の住民が優しいと聞く。これも観光資源だと思うし、皆で共有していけたら良い。

〈後藤准教授〉

雰囲気が良いと言うのは、町民同士の関係性の話か、それとも風土なのか。

〈桑添委員〉

町外から移住して、優しい、住みやすい、安心しやすい風土があると思う。知人3人以上からそのような話を聞いている。

〈後藤准教授〉

ニセコ駅前では花屋を経営されていると聞いたが客層はどのような感じか。

〈桑添委員〉

普段はほとんど地元か蘭越町、倶知安町で、小樽市や札幌市からのお客様もいる。コロナ前は観光客からも花のオーダーがあった。

〈後藤准教授〉

町外の方から、ニセコ町はどのように見えているか。

〈桑添委員〉

優しい、住みたいという話はよく聞く。ただし、ニセコにずっと住んでいる方のなかには、医療が大変だから札幌市に移住する、物価が高くなってきたら移住する、という方もいると聞いている。

〈後藤准教授〉

医療が大変と言うのは、季節的な混雑のことか、それとも全般的な医療拡充のことか。

〈桑添委員〉

高度医療の話である。現実的に小樽市や札幌市の病院に行くことが多い。

〈大橋委員〉

6年前に移住し、すごく良いイメージを持っていた。倶知安町ほど乱開発が進まず、温かいイメージ、自然環境も良く、環境モデル都市として進んでいるイメージがある。実際に来てみても温かいまちと感じる。海外に住んだ経験もあって、日本に住むなら、住民や行政がサステナビリティを意識している場所に住みたいと思っていた。4つの柱でいうと、ニセコ町の観光事業者は町民向けの特典など、様々なサービスをしてくれていると感じる。観光客の地域へのリスペクトで言うと、ヨーロッパの方々は意識が高いので、諸外国から来た方がニセコはすごいなと思ってもらえる取組をしたい。一方で、観光によって生活の質が高まっている実感はない。観光による環境負荷最小化もとても大事だと思うし、加えて子供たちを大切にすることも重視したい。現状、小中学校までは良いけど、高校から外に出る人たちが多と思う。若者たちがニセコに残って盛り上げていける町になったらもっと良いと思う。

〈後藤准教授〉

移住先としてニセコ町を選ぶ際、何を1番に重視したのか。クチコミ、政策など、お聞かせいただきたい。

〈大橋委員〉

夫は町の政策、自分はインターナショナルスクールがあることが決め手だった。

〈高井委員〉

観光振興ビジョンに係る4つの柱を事業者（高橋牧場）として、何が出来るかを考えていた。各事業者がこのビジョンなどを読んで、出来ること出来ないことを考えていく、そしてビジョンに寄せた活動をしていくしかないと思う。自分としてはカーボンオフセットに興味があるのだが、詳しくはわからないので教えて欲しい。

#### 〈事務局〉

カーボンオフセットは、例えば、観光客が新千歳空港からニセコ町までの車で移動すると多量のCO<sub>2</sub>を排出するが、車から排出するCO<sub>2</sub>の代わりに旅行代金の中から500円分の植樹をする等、代替となる取組のことだ。

#### 〈高井委員〉

4つの柱に対して、やはり事業者側が何を出来るのか、ということを考えて行動すること、観光ビジョンに事業者が寄せていくことが重要だと感じる。持続可能な観光を掲げる中で、観光産業は人が支えている部分大きい。観光＝人という部分もあると思うので、人材育成など人材に関する部分、若年層の流出をどう止めるか、なども盛り込んであると良い。また、地元住民に対しても、例えばホテルなら町民用のお得なプランを閑散期に作る、1社でやるのではなく地域全体でやりましょうとなると、それはニセコ町民にとってもプラスになる。観光客だけが楽しむのではなく、町民が楽しめる町づくりをイメージしていくと面白いのではと感じた。

#### 〈後藤准教授〉

先々まで見据えた、ビジョン策定後にどのように動いていくのかと言う意見だと思う。ニセコ町としてどこを目指すのか、企業の協力部分はどこなのか、そしてどこまで頑張れば良いのか、など本来そこを見える化するために指標がある。目線合わせが重要である。

#### 〈岩崎委員〉

「ニセコの観光は何を売りにしているのか」が明確になっていそうでない。観光事業者だけが理解していても意味をなさないと感じている。ヨーロッパでは、観光客・観光事業者の観光に対する理解もそうだし、地域住民の観光への理解が共通化している印象がある。だからこそ自分として魅力的に感じる。ニセコも同様に、地域住民を含めて観光に対する共通理解を持ちたい。例えば、自分たちは温泉ホテルであり、温泉はニセコの魅力の一つと感じているが、地域住民にとっては当たり前になっていて魅力と思っていない。温泉以外にも食やスキーなど色々あるが、それらを地域住民も体験出来る、魅力として気づく機会・きっかけ提供みたいなことが町としてできたら面白いと思う。

#### 〈後藤准教授〉

日帰り入浴や宿泊などで町民利用はどれくらいあるのか。

#### 〈岩崎委員〉

毎日来られる地域住民もいるが、観光客が多い。

#### 〈後藤准教授〉

前回の審議会でも、地域資源を地域住民が使う、町民が町の観光を楽しむという話が出ていた。そういった視点は重要かと思う。

### 〈岩崎委員〉

地域住民に愛されるものでない限り、観光客にも目を向けてもらえないと考えている。

### 〈高久委員〉

ニセコで起業して25年、移り行くニセコを肌感覚で認識している。事業としてバックカントリーなどを安心安全に楽しめるようなガイディングを提供している。その中で、ここまでインバウンドなどでニセコが脚光を浴びた要因は何かを考えると、それは雪だと思う。世界と比較しても圧倒的に雪質が良い。これは誰かが頑張ったとかではなく、根本的に、地形的要因で良い。ただし、このパウダースノーを守るために何か施策をしてきたかといえはしていない。カーボンオフセットなどは自然環境を守る上でも良いと思う。ニセコ固有の自然環境、私たちの生活文化は守っていかなくてはいけない。

観光だけではなく、SDGs 未来都市にニセコ町は選定されている。自然から得られるものが多い。パウダースノー、雪を守っていくのが根幹だと思う。

### 〈後藤准教授〉

パウダースノーはニセコの強みの一つとしてキャッチフレーズにもなっている。ニセコに欠かせない強みだと思う、ここを維持するために、何をすることが重要である。リフトの混雑度の測定や、パウダースノーの状況測定、ニセコールの周知度を測るなどの試みは、ニセコ町独自の取組として良いと思う。これは絶対必要だというものがある程度絞ること、維持のために何が必要かを考えるのが良い。

### 〈尾形委員〉

目指すべき3つの将来像から4つの柱に、どう繋がっているのか見えづらい。特に、通年型リゾートは、どの柱に該当するのか分からない。閑散期の集客、高品質サービスなども、直結する文言は見当たらない気がする。企業やホテルには観光客から得られる利益がそれなりにあると思うが、それがどのように町民還元されるかが難しいと思う。還元は目に見えにくいものであり、一方道路が混雑する、騒音がある、ゴミが出るなど悪いところばかりが目につきやすい。これはどこの観光地も同じだと思う。この解決には、観光客へのルールを作成して徹底してもらい、規制をかけるのが必要と考える。これが出来ないと、町民が誇れる観光地は実現不可能だと思う。ネガティブワードを潰すことが、町民の観光への意識が変わるのに必要だと思う。

また、国際的な基準、世界のニセコといわれているのであれば、ネームバリューに負けないように、このルール作成を行うのはマストだ。具体的などころでは環境以外で言うと安全性・バリアフリーなども入れていくのがわかりやすい。受入側の我慢だけでは成り立たない、来る方にもルールを守ってもらう。住民と観光客が良い関係築くことが大事だ。

### 〈事務局〉

通年型国際リゾートという文言が見当たらないのは辛いところ、地域への貢献度が高まる部分に「生産性向上」「品質向上」とかまで記載しようと思う。観光客にもルールを、は

的確な指摘であると考える。

#### 〈後藤准教授〉

石黒委員指摘のストーリーを持たせる観点を踏まえて作成すると良いかもしれない。

#### 〈事務局〉

たくさんキーワードをもらったので再編集したい。

#### 〈菊井副会長〉

審議会の目的はニセコ町の観光ビジョンを作成することである。ニセコプロモーションボードでもほぼ同じ課題を認識している。やはり通年型観光地になることが大きな課題である。それが出来ると定住人口や観光収入も上がる。環境については、水源や景観に対する保持条例など環境維持のための活動を実施している。また事業者が国籍を含めて広範囲になってきているのも課題だ。例えばそれぞれの事業者が目指すビジョンとニセコ町が目指すビジョンが一致しているのかどうか。ビジョン達成に向けた指標を立てたととしても、その指標のために事業者が一枚岩にならないということも考えられる。次に、お客様目線で考えると、ニセコといえば倶知安町のイメージが強いと思う。北海道の人でさえ、倶知安町とニセコ町の違いがわからない、海外客ならなおさらである。そうなると倶知安町や蘭越町など近隣地域と共通の目線になっているかが重要である。倶知安町との整合性・共通性なども議論の余地がある。最終的には観光事業者が、自社ビジョンとニセコ町のビジョンをどう結びつけていけるかが重要で、ここが指標を達成できるか否かにかかわる大きな課題だと思う。近年、観光事業者よりも不動産事業者が多い気もするので、どう観光と結びつけるのかの議論が重要と思う。ビジョンや指標は、作る以上は達成したいので、一枚岩になって進めていくために、広域行政の調整も必要だと思う。

#### 〈後藤准教授〉

ニセコプロモーションボードが地域間の垣根を超えて調整する組織であると認識している。ニセコ観光圏の連携では、基本的にはニセコプロモーションボードを活用するのが良いと思う。

#### 〈下田会長〉

4つの柱は世界的な潮流だと理解している。結局ニセコ町をどういう地域にしたいか、訪れた人が住みたくなる地域、住民生活が充実して、住民が幸せな地域にしていきたいと個人的に思う。住んでよし、訪れてよし、働いてよし、環境もよし、四方良しとしたい。

ニセコにおける開発行為による環境負荷、そして投資が投資を呼んでいる実態がある。開発に対し、ニセコ町は景観条例などでハードルを高くしているので、地域に受け入れられる開発を今後も進めていくのが良い。自然環境は、ずっと守っていきべき資源だ。

一方、観光の弊害はもちろんあるが20年住んで感じている魅力の一つに、例えば子供と一緒にリフトに乗るとスペイン人と会話できることがある。これは貴重な体験である。ニ

セコプロモーションボードでもニセコローカルカードという各種割引などで地元民への特典があるカードがある。こういった取組なども、うまくビジョンと結びつけられると良い。

#### 〈事務局〉

ランド委員より事前に送付いただいた内容を代読する。ニセコ町も宿泊税を導入すべきだと思う。(観光の)恩恵を町民に見える化するためには、公共施設の改善なども悪くないが、税金の一部を町民が使えるクーポン券にして配付してはどうか。なお、宿泊税は倶知安町のように、パーセンテージで取る方が良い。また、事業者から税を徴収するタイミングは、冬シーズンが終わってから、まとめて徴収できると良い。

ホテルなど観光事業者が町増えても、法人登記がニセコ町以外だと、ニセコ町の恩恵が少ないと思うので、宿泊税等が必要だと思う。

#### 〈中島室長〉

審議会でも指摘があったが、町と事業者のビジョンを一致させることが一番重要だと考える。ビジョンは町が作ったもの、関係者が作ったものだから、と町民にとって他人行儀になってしまっただけでは意味がない。事業者側がビジョンに沿わせなければいけないのではなく、町のビジョンを事業者側に沿わせる必要がある。

4つの柱は一般的なものが多い、ニセコらしさが入れ込めていない。今後、どういうニセコらしさ、ニセコの特徴を入れ込めば良いか、この議論が必要と感じている。

#### 〈後藤准教授〉

数年前に、ニセコ観光圏(蘭越町・ニセコ町・倶知安町)で住民満足度調査を実施した。感じたのは、実は倶知安町とニセコ町、蘭越町では住民の観光満足度は全然違うということである。観光について、最も住民からの強い反応(コンフリクト)があったのが倶知安町である。スキー場の近くだけではなく、駅前など地元客層の居酒屋にインバウンドがくる、生活圏にインバウンドが入ってくるというマイナス面が強く出た結果だと思う。蘭越町は農業が主体で、むしろ倶知安町やニセコ町は羨ましいという意見が出た。そういった面では、ニセコ町はバランスが一番良かった。皆さんのコメントを聞いていると、今は少し違う状況になってきていると感じる。住民の満足度は定期的に測っていくことが大切と感じた。今回の審議会で出た内容などをまとめながら、次回の審議会につなげていきたい。

## 5 その他

事務局から、第3回審議会に関するお知らせ、交通費支払いに関する説明があった。

以上